

# HB通信

編集・発行 /  
一般社団法人  
ひょうご部落解放・人権研究所



〒650-0003 神戸市中央区山本通4-22-25 兵庫人権会館2階  
TEL: 078-252-8280 FAX: 078-252-8281  
e-mail: blrhg@extra.ocn.ne.jp URL: http://blrhg.org/

## 所長の諏訪山だより

### 「脅した者勝ち」という負の連鎖は、断たなくてはならない

国際芸術祭「あいちトリエンナーレ 2019」（津田大介芸術監督）の企画展「表現の不自由展・その後」が75日間の開催予定であったにもかかわらず、わずか3日で中止となった。企画展では「平和の少女像」（ソウルの日本大使館前に置かれたものと同型の慰安婦像）や昭和天皇の肖像写真が燃えるという動画作品などが展示されたことに対して抗議の電話が殺到したうえ、テロ予告などの脅迫電話もあり、愛知県知事を会長とする、芸術祭の実行委員会が企画展の中止を発表した。この企画展に対しては、名古屋市長が「表現の不自由という領域ではなく、日本国民の心を踏みにじる行為であり、許されない」と、展示の中止を愛知県知事に求めたり、官房長官も記者会見で「補助金交付の決定にあたっては、事実関係を確認・精査して対応する」と、補助金交付の厳格化を示唆するなど、政治家の発言も相ついだ。また、「公金を投入して行うべき展示ではない」という批判も、名古屋市長や大阪市長などからあがったという。

そもそも今回の企画展は、これまで展示が不許可になったり、表現の一部が削除されたりした作品などを集めて展示し、表現の自由について広く議論を起こそうという企画である以上、抗議や脅迫が来ることは織り込み済みであったはずだ。だから主催者は、警備を強化し、毅然として展示を続けるべきであった。そうでないと、「脅した者勝ち」になってしまう。現に神戸市で行われる予定だった津田氏が参加するシンポジウムが抗議があったために中止となった。

憲法21条には「一切の表現の自由は、これを保障する」と明記されている。すなわち、国をはじめとする行政は、市民が表現の自由を行使できるよう、環境を整える責任があるということだ。したがって、表現に対しては脅迫などの力による圧迫ではなく、表現（言論）で対抗すべきであり、どのような内容の主張・表現であろうと、それを規制することは、思想の抑圧につながり、絶対にあってはならないことであると、行政は教育・啓発し続ける責任がある。それが表現の自由を保障することの大前提である。どのような表現であろうと、それは批判にさらされる権利があり、抑圧されてはならないのである。今回の企画展の中止は、どのような展示があったのかを知る権利を制約し、表現の自由について議論することを妨げることになってしまった。

それにしても「表現の自由には制約があっても当然だ」と考える政治家が何と多いことか。前述の官房長官や首長たちの発言は、憲法21条をまったく理解していないとしか言いようがない。劣化した政治家たちの発言に寒気立った、酷暑の8月初旬であった。 所長 石元清英



## 『吉本興業と韓流エンターテインメント 奇想天外、狂喜乱舞の戦前芸能絵巻』

高祐二著、共栄書房、2018年2月、1500円＋税

在日コリアンの内輪話で、必ず盛り上がるのが、芸能人やスポーツ選手の「誰それは朝鮮人」という話題である。真偽の程は定かでないが、話題に上った人物が有名であればあるほど心が高まった。たとえ出自を隠していても、私たちの同胞がこんなにも日本人たちを熱狂させている——そう思うだけで、えも知れぬ優越感にひたることができた。

出自を隠して芸能界で活躍している在日コリアンは本当に多い。歌手の錦野<sup>にしきの</sup>旦<sup>あきら</sup>は1995年発行の雑誌の中で「大晦日の『紅白歌合戦』は、われわれ（在日）がいなかったら成り立たないんですよ」と語っている。2004年の韓流ブーム以降、在日であることをカミングアウトする芸能人も増えてはきたが、本名で活躍する人はまだまだ少ない。

そんな中、本書を読んで、目からうろこの思いだった。朝鮮半島が日本の植民地支配下におかれた時代に、日本で朝鮮出身のエンターテイナーたちが絶大な人気を博し、公演会場を満杯にしていたというのではないか。しかも彼らは朝鮮の名前を名乗り、朝鮮の歌を朝鮮語で歌い、民族色あふれる舞踊や演奏で、会場を熱気の渦に巻き込んだという。

日中戦争が始まり、朝鮮人への「皇民化政策」が本格的に始まった1937年、同化政策による締め付けが厳しさを増していった時代に、著者は「朝鮮人芸術家は日本における認知度をますます高め、数多くの舞台に立つようになった」と記す。それを証明するかのように、本の中には大阪の新世界で行われたショーの広告記事（「大阪朝日新聞」1937年2月28日）が掲載されているのだが、ディック・ミネや藤山一郎という有名歌手や、漫才師のエンタツ・アチャコという人気者たちよりひととき大きな扱いで「<sup>ベ・グジュ</sup>裴亀子と朝鮮楽劇団」の見出しとともに、裴亀子の顔写真がど真ん中に堂々と配置されている。

このショーを取り仕切っていたのが「吉本興業」である。吉本興業は彼らに「より朝鮮の民族色を出すように」と要請し、公演では朝鮮の歌や踊りをふんだんに取り入れるように求めた。創始者吉本せいの弟で、実質的に経営の中心となった林正之助、弘高兄弟は、寄席や漫才という笑いを土台に根付かせながら、新鮮なもの、珍しいものに食指をのばした。「林兄弟にとって、売れること、ウケることがすべてで、国籍や民族の違いは、芸を披露する舞台には何の関係もなかった」。そして目の肥えた日本人の観客たちを、より斬新なステージで喜ばせ、土地を奪われ日本に職を求めて渡ってきた多くの朝鮮半島出身者たちの郷愁をおくることで、大成功を収めたのである。昨今、何かとお騒がせな吉本興業であるが、その成功の土台には、朝鮮人エンターテイナーたちの貢献とともに、抑圧された朝鮮人の郷愁をもビジネスに転化させる商魂のたくましさがある。

今、日韓関係はかなり厳しい。著者はそんな時代を憂いながらも、こう結んでいる。「辛い時、悲しい時こそ、笑いを楽しめる文化が希望となり、戦争の影がしのびよる暗い時代も、明日を生きる力の源泉となった」。そんなピュアな笑いや、他者を認め、尊重する寛容さこそ、今の時代に切実に求められているものなのかもしれない。（K）





## 『あの夏、兵士だった私 96歳、戦争体験者からの警鐘』

金子兜太著、清流出版、2016年8月、1500円＋税

2015年、安保関連法案に反対する人々が、「アベ政治を許さない」というプラカードを掲げた。毛筆で書かれた力強い文字をご記憶の方も多いただろう。書いたのは金子兜太（1919～2018年）だ。兜太は戦後日本を代表する俳人であり、朝日新聞の投稿俳句欄「朝日俳壇」や「伊藤園お～いお茶新俳句大賞」等の選者を長らく務めた。そういう大物が書いたということで話題になった。

私はこの人のことをほとんど知らないが、高校か中学の国語の授業で紹介された、「<sup>わんきょく</sup>彎曲し<sup>かしょう</sup>火傷し爆心地の馬拉ソン」という句のことは覚えている。

夏の句なのだろうが、季語はない。俳句というと風流なものを想像する人も多いと思うが、兜太は社会性を重んじて季語のない句、前衛的な句を詠んだ。

『あの夏、兵士だった私』は兜太最後の単著である。兜太は安保法制反対運動の渦中において戦争体験者が果たすべき役割を自覚し、「私は命ある限り、戦争の本当の姿を語り続け、護憲精神を貫きたい」という思いで本書を書いたという。

兜太は太平洋戦争中の1943年に東京帝国大学経済学部を繰り上げ卒業し、日本銀行に就職するも3日で退職、海軍に入る。当時「特殊士官」という、生きて帰れば元の職場に復帰できる制度があったそうで、日銀に戻ることを前提とした志願であった。「どうせほっといても戦争にとられるだろう。でも一兵卒は嫌だ。それならせめて士官として赴任しよう」と考えたそうだ。簡単にいえば、少尉以上の階級の者が士官（将校）で、少尉未満が兵隊である。士官には高度な専門能力が求められ責任も重いとはいえ、一般的には、士官のほうが兵隊より待遇が良く、体力面ではるかに楽だ。はっきり書かれていないが、兜太は士官として重責を果たしたいというより、楽をしたかったという理解でよいと思う。当時のインテリにはよくある話だ。

兜太は1944年2月に海軍経理学校を卒業し、3月に主計中尉として南洋トラック島（日本海軍の一大根拠地で飛行場もあった）に赴任した。主計中尉は、庶務・会計・被服・糧食を担当する主計科に属する中尉のこと。兜太が赴任したのは、トラック島が米軍の空襲で大打撃を受け無力化された直後のことで、敗戦まで日本軍が支配したものの、孤立し補給がなくなり、飢えに苦しんだ。兜太はこの島で、多くの死を見ることになる。死因で最も多かったのは餓死だった。

本書で戦争体験について書いている部分は3割程度であるが、その内容には少々違和感がある。自分自身の生活の具体的なことは、あまり書いていないのだ。それはなぜか。私の勝手な推測だが、主計士官だったことが原因ではなかろうか。確かに彼の周囲で多くの人が餓死したのであろうが、彼自身が餓死寸前になるほど飢えたとは考えにくい。主計科は敵と直接闘うわけでないないので、軍隊内では軽んじられていたが、食料を握っているのが強みで、主計士官と他科の兵隊や軍属とでは食料事情は大きく異なったはずである。主計科がどういうところなのか、兵と士官の違いなどについては、HB通信13号で紹介した『海軍めしたき物語』などを読めばよくわかる。

「私は命ある限り、戦争の本当の姿を語り続け、護憲精神を貫きたい」と言いながら、自分自身のことを率直に書けなかった（書けなかった）ことを非難するつもりない。兜太は、自分が周囲より恵まれていたことに自責の念があったからこそ、今の日本の現状に黙っていることができなかったのではないだろうか。戦争はいつまでも人を苦しめるものだと、改めて考えさせられた。（Ka）



# 部落解放研究第40回兵庫県集会

■日時:2019年11月16日(土)

■場所:神戸市勤労会館 神戸市中央区雲井通5丁目1-2

■参加費:3,000円(資料・報告書) / 学生・障害者1,500円

■弁当代:1,000円(希望者のみ) ※別途お申し込みが必要です

【お申込】部落解放研究第38回兵庫県集会実行委員会事務局(一社)ひょうご部落解放・人権研究所

神戸市中央区山本通4-22-25 兵庫人権会館2階

TEL:078-252-8280 FAX:078-252-8281 Mail:blrhyg@extra.ocn.ne.jp

## ■記念講演

『わたしにもできる 今を生きる人たちに』

講師:サヘル・ローズさん(タレント・女優)

【プロフィール】1985年、イラン生まれ。幼少時代を孤児院で過ごし、8歳で養母と来日。様々な苦難を乗り越えながら、高校時代から芸能活動を始める。日本語、ペルシア語、ダリー語、タジキ語を話し、趣味・特技はテニスや絨毯織りと多彩。また、日本の施設への支援活動など、自らの取り組みが認められ、2018年「第9回若者力大賞(社会をより良くするため活躍する若者に送られる賞)」を受賞。夢はイランに児童養護施設をつくることで、同じ境遇に苦しんでいる子どもたちに支援活動を続けている。現在、女優、タレントとして多くの番組等に出演し、幅広く活躍中。



Photo by 榎本社三

## ■分科会

県内の人権政策の現状と課題—部落差別解消推進法を活かすには / 労働現場に求められる人権啓発 / 学ぶ権利を守るために / 「性」に関する権利について考える

## 2019年度『人権セミナー』

### 第3回「被差別部落と結婚差別」

■日時:2019年9月28日(土)14:00~16:00

■講師:齋藤直子さん

(大阪市立大学人権問題研究センター特任准教授)

■場所:のじぎく会館(ふれあいルーム)

#### ●参加資料代

【一般】800円 【会員・定期購読者・学生】500円

\*申込・問合せは研究所まで(078-252-8280)

### 第4回「メディアと人権」

■日時:2019年10月19日(土)14:00~16:00

■場所:のじぎく会館(101・102号室)

### 第5回 シンポジウム

「部落の所在地を問うこと、  
伝えることがすべて差別なのか」

■日時:2020年1月25日(土)14:00~16:00

■場所:のじぎく会館(201号室)

## 事務局から

- ポルトガルに行ってきた。さまざまな人種の人  
がいて、あたりまえに暮らしている。知り合っ  
た人とハグを交わす。最初は気恥ずかしかった  
けれど、ハグって、本当に暖かい。(K)
- 自宅は、老猫のため冷房が一日中入っています。  
きゃつは飼い主と異なり、暑さ知らずでのうの  
うと暮らしています。まあ、長生きしてくれた  
らそれでいいんですけどね。(Ka)
- 8月は懐かしい人と会うことができます。自分が忘れ  
ていたことも簡単に思い出される時間で、今も大切  
ですが、過去も大切だと感じる今日この頃です。(Y)
- 19人の障害者が、障害者であるがゆえに殺された相  
模原事件から3年目の7月。参議院に重度障害を持  
つ2人の議員が誕生した。2人が属する「れいわ新選  
組」山本太郎代表の「生産性で人間の価値を測るよ  
うな世の中はもうやめよう」の訴えが胸に響く。(H)